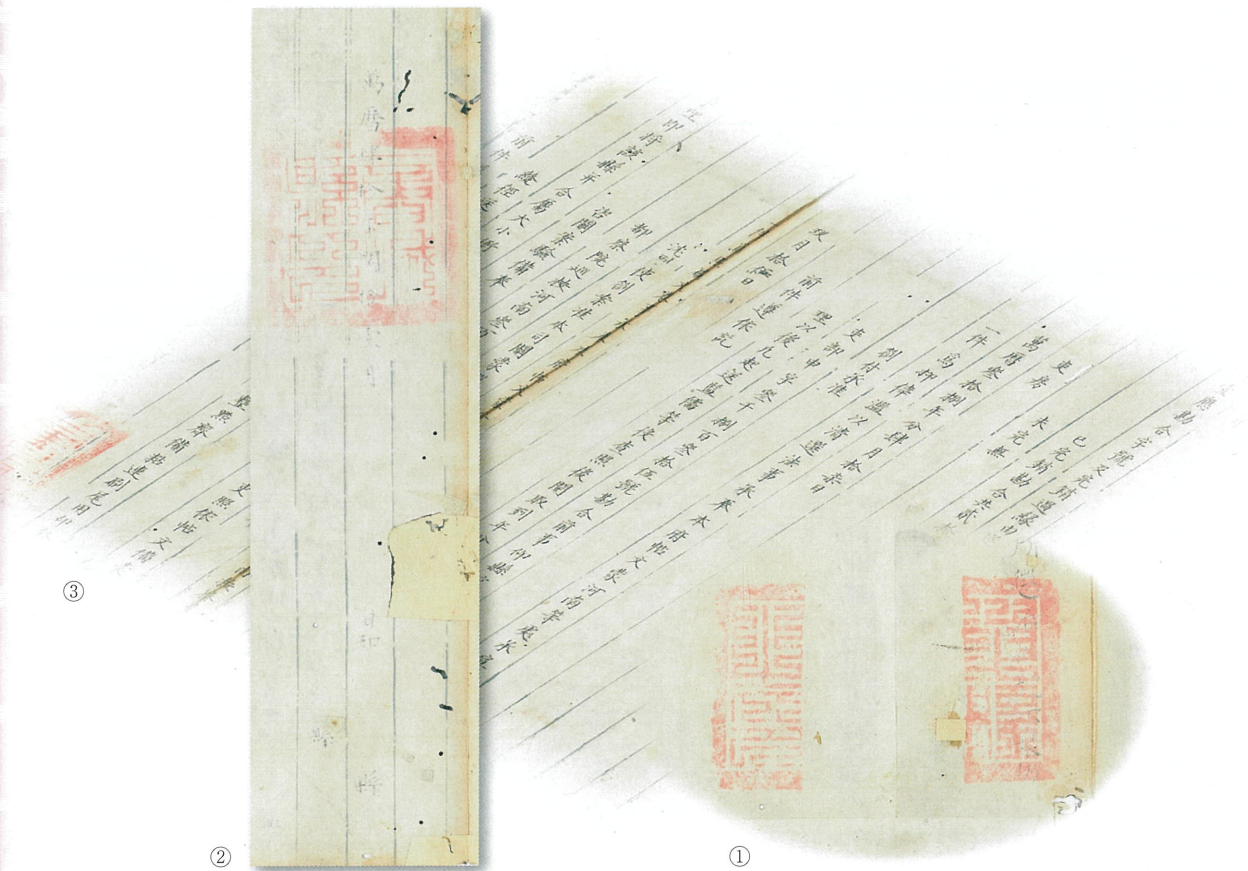


蓬 左

HÔSA



銅人腧穴鍼灸図經
裏打紙文書

銅人臉穴鍼灸図経裏打紙文書

銅人経のウラに明代の公文書が使われていることは、かねてより知られていたらしい。

『蓬左文庫漢籍分類目録』（一九七五年）や、その元となった資料カードには「萬曆中官牘紙拓本」とあることから、昭和の漢籍調査の段階で、この拓本に明代万暦年間（一五七三—一六二〇）の官文書の紙が再利用されていることがわかっていったようである。

ここでは、近年の調査に基づきつつ、今少し具体的に文書そのものに迫ってみたい。

文書の紀年からみえること

この文書が万暦年間のものであることは一目瞭然の事実である。たとえば、表紙の写真②には「萬曆肆拾年閏拾壹月 日」とあり、その下に知縣（県の長官）と縣丞（次官）・典史（県の文書管理係）の署名欄がついている。③にも「萬曆參拾捌年分」と見え、どの文書にも万暦三十年代後半の日付が見られる。

万暦四十（一六二二）年は日本では「嚴流島の決闘が行なわれた慶長十七年、江戸幕府二代将軍秀忠の治世にあたる。その弟で尾張家初代の義直が名古屋城二の丸に「御文庫（蓬左文庫の前身）」を創設するのが元和三（一六一七）年のこと、その義直がみまかるのが慶安三（一六五〇）年のことであるから、この紙

が装幀用として再利用され、名古屋の義直のもとにやって来た時期は、江戸初期の三〜四十年ほどに限定できる（『蓬左』一〇六号の丸山裕美子氏の説に拠る）。

ハンコ（官印）からわかること

写真②には日付にかかるように「商城縣印」という方印が見える。これはこの報告書が万暦四十年閏十一月に河南懷慶府下の商城県の役所で作成されたことを意味する。文書の本文には具体的地名が出てこなくとも、印記を見ればどの役所かを特定でき、文書伝送のルートも見えてくる。

また、写真①では「巢縣之印」という方印が半分に割れている。これは、紙を半分に山折りして紐で綴じて冊子にした報告書のノド（各ページの見開き下部）に官印を割印することで、ページの差し換えや改竄を防ぐものである。本来は正方形に見えていた印面に、もともと綴じ目の中にあつた余白が広げられて間に入るためにこうなるのだ。これも明代の公文書管理の一端が垣間見える部分である。

興味深いことに、この紙を裏打に使った職人は、この朱印をどうやらデザインとして、あえて見えるように配置しているらしい。

このように、裏打紙文書からは、書かれた文字情報のみならず、官印の現状などからも、多くの情報を読み取ることができるのである。

（立命館大学 猪俣貴幸）

蓬左通信

令和四年度（二〇二二）より取り組んできた「伊藤満作家資料」の悉皆調査がひと段落つきましたので、この三月に名城大学米澤准教授が中心となつてその成果を『伊藤満作家資料目録』として取りまとめることになりました。近代化前後の大口資料がまとまって残されているのは、とても貴重とのこと。この目録を元手に、より一層研究を進めていこうと考えています。

令和七年（二〇二五）は蓬左文庫が誕生して九十年（昭和十年（一九三五）／東京目白で開館）を迎える節目の年です。徳川美術館と共に周年記念展を実施する他、近年取り組んできた所蔵資料の研究成果を展覧会等を通じて広く発信していく予定です。長きに渡り、蓬左文庫の活動を支えてくださった方への感謝を込めつつ、初めて来ていただく方に、蓬左文庫っておもしろいなと感じていただけるような機会にしたいと思っています。

（蓬左文庫 星子桃子）

名古屋市蓬左文庫 〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地 TEL(052)935-2173 FAX(052)935-2174
ホームページ <https://housa.city.nagoya.jp/> 〈蔵書検索もできます。〉

ご利用案内

■休館日／月曜日（祝日・振替休日のときは直後の平日）※変更することがあります。

■展示室／【開室時間】午前10時～午後5時（入室は午後4時30分まで）

■閲覧室／無料 館外貸し出しはいたしません。

【閉架図書】午前9時30分～午前12時 午後1時～午後5時 【開架図書】午前9時30分～午後5時

【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。

電話・郵便による申込みも可。

